

■ I

令和 2 年度

I 国 語

(9 時 00 分 ~ 9 時 50 分)

注 意

- 問題用紙は 4 枚 (4 ページ) あります。
- 解答用紙はこの用紙の裏面です。
- 答えはすべて、解答用紙の所定の欄に、文、文字などで答えるもののほかは、ア、イ、……などの符号で記入しなさい。
- 解答用紙の の欄には記入してはいけません。

注意

字数指定のある問題の解答については、句読点も字数に含めること。

次の1、2の問いに答えなさい。

1 次の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。また、——線をつけたカタカナの部分で、漢字に直して書きなさい。

- (1) 努力の末に成功を収める。
- (2) 新入生の歓迎会を催す。
- (3) 投書が新聞に掲載される。
- (4) 論理の矛盾に気づく。
- (5) 春の日差しがフリ注ぐ。
- (6) 完成までに十年をツイやした。
- (7) 腕のキンニクを鍛える。
- (8) 歴史をセンモンに研究する。

2 次の行書で書かれた漢字について、楷書で書く場合と比べて、点画の省略が見られる漢字はどれか。ア～オの中から一つ選びなさい。

ア 府 イ 秒 ウ 旁 エ 探 オ 貯

次の詩と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

若竹が無い

下田 喜久美

自分を大切に守っていた

表皮を

いきおいよく はがし

きつぱりと ぬぎすて

グンと 青空に

かけ昇る

若い新芽たちは

蒼い肌から

若者の香りを

あたり一面に ちりばめながら

匂いたち

空のむこうに

何があるのか……

ただ ひたすらに

かけのぼり

いや かけぬけ

あ

若竹が

無い！

竹の表皮は、成長していく過程で自然とはがれていきますが、この詩では、その様子を「I」という言葉を用いて表現し、若竹が自らの意志で、自分を守る表皮と別れて、成長しようとしているかのように描いています。また、「II」という視覚以外の感覚で捉えた言葉からは、生命力に満ちあふれる若竹の姿を想像することができます。

そして、作者は、若竹が向かう「空」へと思いをめぐらせます。無限に広がる「空」に向かって、若竹が、III 姿がいきいきと表現され、若竹の成長の勢いが伝わってきます。

1 I にあてはまる最も適当な言葉を、右の詩の中から四字でそのまま書き抜きなさい。

2 II にあてはまる最も適当な言葉を、右の詩の中から五字でそのまま書き抜きなさい。

3 III にあてはまる最も適当な言葉を、次のア～オの中から一つ選びなさい。

- ア あきらめず、ゆつくりと近づいていく
 - イ 強引に、周りの木を押しよせ進んでいく
 - ウ いちずに、とどまることなく伸びていく
 - エ 怖がらず、何度も繰り返し挑んでいく
 - オ しっかりと、不安を乗り越え育っていく
- 4 この詩の第五連「あ／若竹が／無い！」について説明したものと最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

- ア 若竹の成長に気づいたうれしさを表現し、目では確認することができないほど背丈が伸びた竹の姿を印象づけている。
- イ 若竹の成長に対するとまどいを表現し、自然の力を借りながら人間の予測を超えて成長する竹の姿を印象づけている。
- ウ 若竹の成長に気づいた安心感を表現し、厳しい自然の中でもたくましく成長を続けていく竹の姿を印象づけている。
- エ 若竹の成長に対する驚きを表現し、もはや若竹と呼ぶことはできないほど立派に成長した竹の姿を印象づけている。
- オ 若竹の成長に気づいた寂しさを表現し、周囲の植物に入りまじって見分けがつかなくなった竹の姿を印象づけている。

三

次の文章と資料を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、林の中にして定を修する者ありけり。心を静めて修せ

(精神を集中して修行する者がいた)

んとするに、林に鳥集まりて、かまびすしかりければ、仏に

(騒々しかったので)

この事を歎き申すに、「その鳥に、羽一羽づつ乞へ。」と

宣ふ。さて帰りて乞ひければ、一羽づつ食ひ抜きて、

取らせけり。また次の日乞ひける時、鳥共のいはく、「我等

は羽をもちてこそ、空を翔りて、食をも求め、命をも助くる

に、日々に乞はれんには、みな翼欠けてむず。この林に

住めばこそ、かかる事もあれ。」とて、飛び去りぬ。

○資料(本文の前に書かれている内容をまとめたもの)

ある僧が僧坊(寺院に置かれる僧のすまい)を造ろうとして、

あらゆる人に資金や資材の提供を求めたため、人々はこれを嫌

がった。仏はその様子を伝え聞き、弟子たちを戒めた。

「食ひ抜きて」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらが

なで書きなさい。

2 次の会話は、本文と資料について授業で話し合ったときの内容の

一部である。あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

Aさん 「修行する人が仏の助言で鳥たちを追い払うことがで

きたという話だね。」

Bさん 「うん、鳥は二日続けて羽を求められて、このままで

Cさん 「私は、資料にある、本文の前に書かれている内容との

関連を考えてみたんだけど、本文に出てくる鳥と、

資料に書かれている人々は、どちらも自分のものを差

し出すように求められているという共通点があるね。」

Bさん 「そうか、羽をねだられた鳥の気持ちは、人々の気持

Cさん 「なるほど。そうすると、単に鳥を追い払った話とい

Aさん 「そうだね。資料の内容との関連を考えることで、最

初に読んだときとは異なる理解ができたよ。」

1 「仏の助言」とあるが、仏の助言の具体的内容を、本文(文語文)

中から八字でそのまま書き抜きなさい。

(1) 「違った理解」とあるが、その内容の説明として最も適当なもの

を、次のア～オの中から一つ選びなさい。

- ア 他者に負担を求めるときには相手の反発を覚悟し、粘り強く説得を続けて協力への理解を得るべきであることを伝えている。
- イ 他者に援助を求めるときには相手を感じる負担を理解し、むやみにものを要求することは慎むべきであることを伝えている。
- ウ あらゆる困難は自分の力で乗り越える必要があり、他者の力に頼らずに柔軟な発想で解決するべきであることを伝えている。
- エ すべての犠牲にして修行に励むことが重要であり、自分の利益を優先する者は厳しく指導するべきであることを伝えている。
- オ 動物は本能によって行動するため要求を拒否するが、人間は厳しい要求も我慢して受け入れるべきであることを伝えている。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

（中学二年生の佐古葉子は、絵を描くことが好きで、小学四年生のとき、同じ趣味をもつ瀬川しおりと親友になった。しかし、中学校入学後、宮永朱里を中心とするグループに葉子が入ったことで、しおりとの関係が変化し、話をする機会が減ってしまった。そんな中、春の体育祭に向けて、葉子はしおりたちと一緒にクラス応援旗を制作する係になる。）

しおりとは、早朝の教室でしゃべったのをきっかけに、じよじよにはあるけれど言葉を交わすようになっていた。ぎこちなさはまだ完全に消えてはいないし、しおりのほうに壁を感じることもときどきある。だけど、「葉子」としおりが呼んでくれるようになったことだけで、今は十分にうれしかった。

それに――絵を描くことは、やつぱり、すごく楽しかったんだ。

普段はめったに使わないような大きな刷毛で、思い切り、まだ白いところをすうつとなぞる。そうすると、心にあつたもやもやも、自分のふがいなさも、全部ぜんぶ、ざあつと流されていくような気がした。百井くと松村さんは、細かい作業が苦手なようで、細筆を使って描くところは、私としおりのふたりでやった。息をつめて、筆先に集中して、丁寧に色をつけていく。そうして、ふうつと息を吐いて筆先を持ち上げる瞬間は、急に視界が広くなって、清々しい気持ちになれる。

作業を終えて、片付けをしている時に、

「だいぶ、進んだね。」

と、うれしそうに百井くんが言った。「頑張れば、明日か明後日には完成するんじゃないかなあ。」と松村さんがあいづちを打ち、私としおりも、笑顔でうなずく。応援旗を見下ろせば、バステルカラーの空の中に、まだ白いままのクジラのシルエットがくつきりと浮かび上がっていた。

――どうか無事に、この絵が完成しますように。

祈るようにそう思いながら、私はそつと、教室のドアを閉める。

午後四時。外は、まだずいぶん明るくて、グラウンドからは野球部の掛け声が、中庭からはトランペットの音色が響いている。作業を開始してまだ十分しか経っていないこともあって、その時教室にはまだ、朱里も含めた応援旗係全員が顔をそろえていた。

そんな時、それは起こった。

「あ。」

ぼつ、と目の前で鮮やかな赤色の絵の具がしぶきのように散ったのと、松村さんが短い悲鳴を上げたのは、どっちが先だったんだろう。

嘘。

気づいた時には、背景の空の上に、赤い絵の具が点々と散っていた。拭きとる間もなく、赤い絵の具はすうつと吸いこまれるようにシミになっていく。目の前には、赤く染まった筆をパレットに置いて、青ざめた顔をした松村さんの姿があった。「ごめん！ ごめんなさい……。」

一瞬、しん、と静まり返った教室の中で、だれよりも先に声を上げたのは、松村さん本人だった。今にも泣きだしそうな顔で、「どうしようどうしよう。」とろたえている。

実際、これはまずいかも、というのには、私自身も思ってしまったことだった。上から塗り直したって、背景の色が薄いぶん、どうしても派手な赤色のほうが浮き出してしまう。ごまかそうとしても、かえって悪目立ちしてしまいそうだ。だけど今は、涙目になっている松村さんを責める気にはなれなかった。

大丈夫だよ、なんとかなるよ。――
そうフォローの言葉を口にした。けれど、その時だった。

「えー、超目立つじゃん。どうすんの？ これ。」

ロコツな物言いにごよつと顔を上げると、さつきまで手持ちぶさたにしていた朱里が、すぐそばに立っていた。きれいに整った眉をひそめて、応援旗を見下ろしている。

「あ、でも、上から塗り直せば……。」

おずおずと、百井くんが言いかける。

けれどそれを朱里は、「や、そこだけ塗り直しても、かえって目立つでしょ。」とあつさり一蹴した。その一言に、松村さんはさらに耳を真っ赤にして、「ごめんなさい……。」とうつむいてしまう。しおりが手を当てた松村さんの肩は、すでに、泣きだす寸前のように小さく震えている。

……

思わず隣をふりあおぐと、朱里はもう他人事みたいにつまらなそうにそっぽを向いていた。

その瞬間、私の中で、何かが弾けた。

「朱里。」

口を開くと、思ったよりも低い声が出て自分でも驚いた。

朱里が、おつこうそうに首をもたげて私を見る。その視線にひるみそうになっただけれど、私は、構わずに口を開く。

「……なんで、そういう言い方するの。それに、ずっとサボってたじゃん、朱里。こんな時だけ責めるのって、おかしいよ。」

水を打ったような静けさの中で、カツン、と時計の針が動く音がした。しおりの、そして百井くと松村さんの視線をひりひりと肌に感じる。怖い。怖くてたまらない。

「……何ソレ。なんであたしが、悪者みたいになつてんの？」

抑揚のない声で言つて、朱里がカバンをつかむ。そしてポニーテールを揺らし

て、私をまっすぐに見た。少し前まで「葉！」と笑いかけてくれたいた、勝ち気な猫みたいな瞳。でも今そこにあるのは、以前のような親しみじやなかった。

「日向」と「日陰」の境界線。それを朱里がたつた今、私の前に、完全に引いたことが、はつきりと分かった。

「……もういい。帰る。」

そう吐き捨てるのと、ふり向きもせず、朱里は足早に歩いていってしまった。その背中を視線だけで追いかけるながら、私は、そつと目をふせる。

泣きたかった。

だけど、泣かない、と思った。

だって、私は今、朱里に本当の気持ちを言つた。そのことに、後悔はなかったから。

ゆつくりと深呼吸してふり向くと、しおりと最初に目が合った。心配そうなそのまなざしに、大丈夫だよ、というふうには、私はうなずいてみせる。

「佐古さん……ごめんなさい。私のせいで。」

目を赤くした松村さんに、私はううん、と首をふつた。それは、本当の気持ちだった。私と朱里が衝突したのは、絶対に、松村さんのせいじゃない。

「……だけど、どうしようか。これ。」

と百井くんがつぶやいて、私たちは改めて、赤く散らばったシミを見下ろした。淡い色が混じり合った幻想的な空の中に、点々と散った鮮やかな赤。たしかに、そこだけ見れば、違和感はある。だけど、なんて鮮やかなんだろう。

そう思った時、びんと心にひらめくものがあった。そうだ、初めてしおりと出会った日、私たちの間を吹き抜けていった風と、ひらめく花びらと――

「……花。」

ぼつんとこぼした私のつぶやきに、三人が、いつせいに顔を上げる。

「花？」

首をかしげるしおりに、私は大きくうなずいた。

「そう。隠すんじゃないで、デザインの一部にするのってどうかな。空に花びらが舞つてるようなイメージで全体に描きたして。そしたら、遠目からでも華やかに見えるし……。」

そこまで言った時、みんなの視線が私に集まっているのを感じて、はっとした。遅ればせながら恥ずかしくなつて、かつと頬がほてる。どうしよう。もし

かして、おかしいことを言つてしまったらどうか――

けれど、その時。

「いいと思う。すごく。」

え、とまばたきをする私の前で、しおりがまっすく私にほほえみかけて言つた。

「やろうよ、それ。」

（水野 瑠見「十四歳日和」より）

注1 応援旗を制作する係のメンバー。注2 明るく柔らかい感じの色。

注3 輪郭。注4 「露骨」と書き、感情などを隠さずに表すこと。

注5 はねつけること。注6 めんどくさく気が進まないこと。

注7 怠けていた。注8 長い髪を後頭部で束ねた髪型。

1 「絵を描くことは、やつぱり、すごく楽しかったんだ。」とあるが、このときの葉子が感じている「絵を描くこと」の楽しさの説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 大きな面を一気に塗るときと、細部を丁寧に描くときは、どちら

も同じくらい緊張感を求められること。

イ 使い慣れない刷毛で塗るときと、得意な細筆で描くときとでは、

刷毛の方が繊細な感覚を求められること。

ウ 大胆に刷毛で塗るときと、意識を集中して細筆で描くときとでは、

それぞれ異なる満足感を得られること。

エ 刷毛で大きな面を塗るときと、細筆で描くときとでは、細筆の細

やかな作業の方が達成感を得られること。

オ 協力して大きな面を塗るときと、一人で細部を描くときは、ともに

視界が大きく広がる感覚があること。

2 「おずおずと、百井くんが言いかける。」とあるが、このときの百井

の心情の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びな

さい。

ア 朱里が強く怒りをぶつけてきたので、反論する怖さはあるが、も

う応援旗の修復はしたくないという思いを伝えようとしている。

イ 朱里があらさまに失敗を非難したので、発言をためらいながら

も、まだ応援旗は修復できるという思いを伝えようとしている。

ウ 朱里が簡単に作業を投げ出したので、仲間が減る寂しさはあるが、

きつと応援旗を修復してみせるという思いを伝えようとしている。

エ 朱里が厳しく対応を迫ったので、返答をあせりながらも、誰かに

応援旗の修復をしろという思いを伝えようとしている。

オ 朱里が率直に感想を述べたので、普段との違いにとまどいながら

も、すぐに応援旗を修復したいという思いを伝えようとしている。

3 「泣きたかった。だけど、泣かない、と思った。」とあるが、葉子が

泣きたくても泣かないと思つたのはなぜか。六十文字以内で書きなさい。

4 「まばたきをする私」とあるが、このときの葉子の心情について次の

ように説明したい。あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

葉子は、旗を眺めているうちに、初めてしおりと出会った日

のことを思い出し、そのときに見た情景から、飛び散ったシミ

を

自分のアイデアを夢中になって話している途中で、三人の視

線に気づいた葉子は、

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

そのとき、しおりが自分の提案を評価する発言をしたため、驚

きを感じている。

六

次の【資料Ⅰ】は、外来語や外国語などのカタカナ語（以下「カタカナ語」とする）を使用した文章の例であり、【資料Ⅱ】はカタカナ語の使用に関する意識を調査した結果である。【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】を読み、あとの条件に従ってカタカナ語の使用についてのあなたの考えや意見を書きなさい。

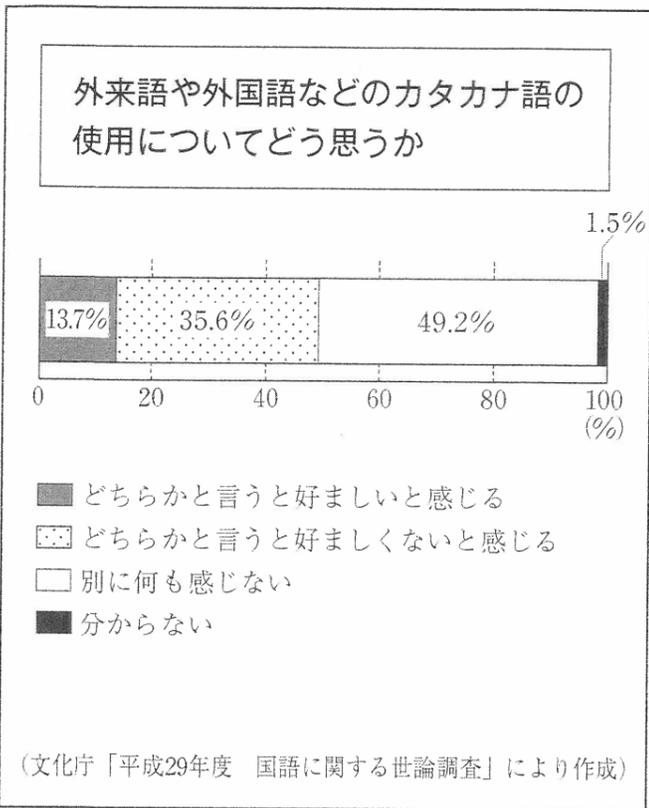
【資料Ⅰ】

私は、スポーツを通して、コミュニケーションの重要性と、^{注1}明確なビジョンをもって練習を継続することの大切さを学んだ。また、^{注2}困難なシチュエーションでも粘り強く取り組むことで、記録や勝敗以外の部分でも、自分がレベルアップしたという実感を得ることができた。

注1 将来の見通し。展望。

注2 状況。局面。

【資料Ⅱ】



条件

- 1 二段落構成とすること。
- 2 前段では【資料Ⅰ】と【資料Ⅱ】を読み、カタカナ語の使用という観点から気づいたことをそれぞれ書くこと。
- 3 後段では前段を踏まえて、カタカナ語の使用についてのあなたの考えや意見を書くこと。
- 4 全体を百五十文字以上、二百字以内でまとめること。
- 5 氏名は書かないで、本文から書き始めること。
- 6 原稿用紙の使い方に従って、文字や仮名遣いなどを正しく書き、漢字を適切に使うこと。